
2017年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 三代 純平氏

【授賞理由】

三代純平氏は、ライフストーリー研究を中心に、日本語教育に関わる研究と実践の両面で幅広く活動する若手研究者です。また近年は、学生と企業・地域を結ぶ実践を行うなど、日本語教育の社会的認知の向上や社会的環境づくりにも大きく貢献されています。

近年、人文社会系の研究において社会構成主義的な認識論へのパラダイムシフトが進行し、質的研究への注目が高まっています。三代氏は質的研究の一分野であるライフストーリー研究に早くから取り組み、単著『『個の文化』探求としての言語文化教育研究—ライフストーリー研究と実践研究の経験を通じて—』（2013年『言語文化教育研究』11号）、単著『『声』を聴くということ—日本語教育学としてのライフストーリー研究から』（舘岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』2015年、ココ出版）をはじめとして、研究成果を活発に発信してこられました。また、リテラシーズ第14号（2014年）における特集「言語教育学としてのライフストーリー研究」の企画や『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ—』（2015年、くろしお出版）の編集にも携わり、日本語教育学におけるライフストーリー研究を牽引しておられます。これらのご研究では、当事者一人一人の声を丹念に聞き、それを解釈する過程を通じて、研究者が自らの「構え」や日本語教育そのものの意味を問いなおすことの重要性が主張され、日本語教育に関わる人々に大きな示唆を与えています。

また、研究と実践の往還の中に研究活動を位置付けることも三代氏の活動の大きな特徴と言えます。その分析対象は、日本事情・文化教育、留学生のキャリア支援、オープンキャンパスなど多岐にわたっており、共編著『実践研究は何を目指すか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』（2014年、ココ出版）では、実践研究を「実践への参加者たちが協働で批判的省察を行い、その実践を社会的によりよいものにしていくための実践＝研究」と定義し、実践研究を通じた「つながり」が生まれることの可能性を示しました。この主張をなぞるように、ご自身の教育実践においては、インタビューの実施及びウェブサイトへの掲載を行うインタビュープロジェクト、公共CMの制作プロジェクト、産学共同プロジェクトによる映像制作など、学生と地域、企業、公共団体、教育機関をつなぎながら、従来の日本語教育の枠に収まらない活動を企画・実施されています。

さらに、言語文化教育研究学会の立ち上げや運営にも中心メンバーの一人として関わり、言語や文化の教育に関心のある研究者・実践者のネットワークづくりに尽力されています。

このような実績を評価するとともに、今後のさらなる活躍を期待して、三代氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上